〈共同研究報告〉

# 日本の本草書と園芸書

塚本洋太郎

私が花卉園芸、花の園芸を学術的に取り上げたことは戦後のことです。戦争前から数人の専門家がおられたんですが、私は偶然、自分の出た母教室に一九五二年、帰ってきました。じつは大学を出て四年ばかり助手をしていたのですけれど、哀れな助手で、叱られまわってですね、最後に「お前はよそへ出て行け。実際を知らんと園芸学は成立しない」とさんざんやられて、もう京都はあんまり気に入った場所じゃなかったんです（笑い）。それで「こんなとこには二度と来んぞ」という気で、「何処へでも出して下さい」と下駄を預けたんですが、アメリカとの戦争のはじまる十二月の初めに行けといわれたのは、大阪池田市にあるいまの園芸高校です。もっと遠いところに、京都からうんと離れたところに行きたいと思ってたのに、近いところに行くことになりました。

「それで、なにをやるんですか？」「あそこに温室がある。そこの温室の観賞植物をやれ」と。私の三年先輩でその頃、先生に非常に評判のいいかたがそこにおられ、関東にある千葉の高等園芸、それに匹敵するものを作る準備をしてるから間違いない、といわれました。私の前任者は、鳥取高農の教授に栄転されたんです。その後を埋めるということでした。京都大学の農学部というのは旧制大学の中では四番目にできた農学部で、東大、北大、九大、そのつぎに京都にできた。園芸教室が二講座あるんです。それで、後でだんだん分かってきたんですけど、私らが卒業したころ、本土の各府県の農事試験場の場長というのはほとんど東大卒業生で、作物学をやってるか、土壌・肥料。園芸なんてのは問題にされてない。その園芸のなかで花なんかというのは、およそ問題にされてない。大学卒業してそんなものやってるとは何事だ！　っていうような（笑い）時代だった。「約束上、どこへでも行きます」といって大阪へ行きました。しかし、その学校は非常に空気の明

るいいいとこで、「ああ、京都を離れてよかったなぁ、京都なんか二度と来ないから」と思っておったんですけど、戦後やむなく、変なことで帰ってくるということになったんです。

京都に帰った後しばらくして、私のやっておる仕事の関連で、一九五八年（昭和三十三年）にフランスのニースで国際会議があって、日本からだれか一人出てきてくれと、それで私にお鉢がまわってきて出かけました。当時、花卉園芸を専門にやっている人というのが非常に少なかったんです。その後、私は努力をして学会のなかに花卉部門を作りました。なかなか旅費がなくて、出てくれる人が少ない。それで私は自分のポケット・マネーを少し出して、奉加帳を作り、タキイ（タキイ種苗株式会社）に持って行って、こういう理由で旅費が要るから寄付してくれ、それからサカタ（サカタ種苗株式会社）に持って行って金を集めて、春・秋の学会に二人か三人ずつはずっと旅費を出してあげた。だれに出してあげたかそんなことすっかり忘れました。そうして苦労して辞めるころには、花卉部会は立派な部会になりました。

私は小学校時代から絵を描いては展覧会に出してもらったり、絵が好きで高等学校時代、大学の時も美術クラブに入っていました。それで西洋に行けば、天気が悪くて写真が撮れない時は、たいてい美術館をまわっておりました。やっぱり花の世界、花卉園芸というのはヨーロッパが中心です。ヨーロッパを見なければこの世界は勉強にならない。それ以来、今年まで三十年の間に二十二回の調査をやっています。アメリカのほうは七、八回しか行ってません。あとは東南アジアを歩き廻ってまして、それから南アフリカ、オーストラリア等を歩き廻りました。私にとっては植物が育っているところ、どういう状態で育っているかを見て廻るのがいちばん重要です。

私の隣の教室の菊池先生がこの学会のいちばんトップでした。この先生は果樹園芸の歴史をやっておられまして、それでボーナスというボーナスはみな本を買って本草書を随分集めておられた。それを「大体、何間になりました」と間数でいっておられたですね。お宅の図書は大変なもんでした。それでしょっちゅうお話を聞いていましたが、そのお話のなかに、張騫、シルクロードのことが出ていました。菊池先生はお隣が新村先生でした。新村先生が広辞苑をまとめておられ、私は最初の広辞苑からお手伝いをさせて頂きました。菊池先生の膨大な中国、日本の本草書と江戸時代の園芸書は現在、京都大学の附属図書館と農学部図書室と薬学部図書室に分散して収められています。

助手時代に一夏、満州の開拓地へ行きまして、北京を回って帰ってきましたが、その時には二百円もらいました。その時の二百円というのは大変価値がありましたねぇ。ゆっくり旅行して、帰りに北京で古本街を歩き、「斉民要術」と「秘伝花鏡」を買いましたが、これが中国の花卉園芸のなかでテキスト・ブックなんですね。これは日本

に入ってきて、元禄以後の本草学者にもよく読まれました。平賀源内がこれを丁寧に見まして、句読点をつけて、六冊本で出てるんですが、私が北京で買ってきた花鏡は、ペランペランの安物でした。「斉民要術」のほうは持って帰りましたら、菊池先生が「ちょっと見せてくれ」といわれ、「僕のと替えてくれ」（笑い）と。「まぁいいわ。先生にいわれてはしょうがない」と思って替えましたけど、この頃のは見てみますと、これも安物のペラペラですねぇ。僕のは良かったけれども、京都大学にいまは入ってしまっています。その時は「秘伝花鏡」なんか後でやるつもりもなにもなかった、「なんでこんなもの買っとったんかな」と思って、不思議になっているんですけどね、現在では見ることが多くなってきました。

さて、まずリスト（表1）にしたがってお話しします。

最初に李時珍の「本草綱目」、これは私は日本訳のものしか家には持っておりません。それからこのリストの二番目、これはオランダのものですが、アメリカから新しいプリント版が出たのを買ったんです。三番目もそうなんですけど、三番目と四番目、これは英国の有名なものなんですが、戦争前には東大の植物園の図書館に一冊ありました。三番目の「ホルトス・フロリドス」、これは私の先生が京大の農学部を作る時にちょうど留学しておられて、あちらで買ってこられたものがありました。原本は教室にありました。四番目はいま申しましたように東大に一冊しかなかった。五番目、これは私の教室に一冊ありました。この三番目と五番目とは、私が定年になって辞めた時に、長期借り出しで家に借りておったん

**表1　主要園芸書リスト**

| | |
|---|---|
| 李時珍「本草綱目」 | 1596 |
| Emanuel Sweets “Florilogium” | 1612（Amsterdam） |
| Crispin Van de Pass “Hortus Floridus” | 1615（Utrecht） |
| John Parkinson “Paradisi in Sole Paradisus Terrestris” | 1629（London） |
| John Gerard “The Herbal” | 1633（1597）（London） |
| Adams Lonicers “Kräuterbuch” | 1679（Francofurt） |
| 陳淏子「秘伝花鏡」 | （1662〜1721）康熙戊辰 |
| 水野元勝「花壇綱目」 | 1681（延宝9年） |
| 伊藤伊兵衛「錦繡枕」 | 1692（元禄5年）（三之丞） |
| 伊藤伊兵衛「花壇地錦抄」 | 1695（元禄8年）（〃） |
| 伊藤伊兵衛「草花絵前集」 | 1699（元禄12年）（〃）三之丞，政武 |
| 伊藤伊兵衛政武「増補地錦抄」 | 1710（宝永7年） |
| 伊藤伊兵衛政武「広益地錦抄」 | 1719（享保4年） |
| 伊藤伊兵衛政武「地錦抄附録」 | 1733（享保18年） |
| 松岡恕庵「桜品」 | 1757（宝暦7年） |
| 松岡恕庵「梅品」 | 1760（宝暦10年） |
| 金太「草木奇品家雅見」 | 1827（文政10年） |
| 水野忠暁「草木錦葉集」 | 1829（文政12年） |
| 岩崎灌園「本草図譜」 | 1830（天保元年） |
| 呉其濬「植物名実図考」 | 1848（道光28年） |

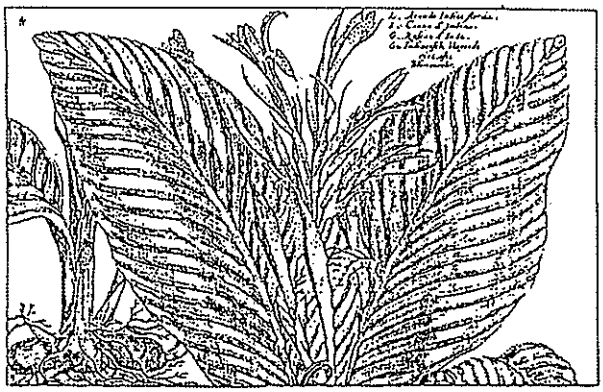


図1 「ホルトス・フロリドス」の中のカンナの図

ですけど、間もなくアメリカから翻刻版が出て、それを求め原本は教室に返しました。五番目、ジェラードの「ハーバル」、これは一六〇〇ページ、片手にとても持てないように重い。実に丁寧な図が多く入っております。三番目の「ホルトス・フロリドス」をよく調べました。

それを見て、「やっぱりそうだなぁ」とつくづく思いましたのは、「ホルトス・フロリドス」には百枚の図が入っております。その図の一枚は、これですね（図1）。この程度にですね、実に克明な図が入っている。むこうは金属版か、石版ですからね、丁寧に図が描けるわけです。しかも非常に写実的です。こういう図が百枚入っていますが、アネモネにはじまってね、スイセンだとか、チューリップだとか、アイリスだとか、地中海原産の植物、とくに球根類が非常に多いんです。木本は少ない。バラとクレマチスがあるっきりで、木本は非常に少ないです。宿根草はいくらかありますが、球根と一年草が多いんですね。十五世紀の終わりにアメリカが発見された後、十六世紀にね、アメリカからヨーロッパに植物が

図2 「草花絵前集」の中に出ているアメリカ原産の草花

入ってきました。そのなかでいちばん尊重されたのは、ピーマンだと思います。コロンブスがペパーを求めてアメリカが発見されたわけですから、トウガラシもペパーといいます。あれを発見して持って帰った。これは非常に彼らの目的に沿う植物の一つだったわけですね。それから後には、トマトだとかインゲンマメ、カボチャ類などが入ってきます。

そういう食べ物に関係のない観賞植物ではなにが入っておったかといいますと、カンナ、ヒマワリ、オシロイバナ、それからタバコ、そしてマリー・ゴールド。この五つがですね、ジェラードとパーキンソンの本を見ますとね、どちらにもみな入ってるんです。そこで「これはヨーロッパで十六世紀に非常に広がったんだな、だから十七世紀の初めにはこの五つが全部揃って入ってるのだろう」と思ったんです。日本ではどうかなぁということで、ひょっと調べてみますとですね、「花壇綱目」のなかにそれが出てきます。さらにそれから後、江戸中期の伊藤伊兵衛「草花絵前集」、これに図が出てるんです。この本は三代目の伊藤伊兵衛が図を書いておって、四代目の伊藤伊兵衛がそれをまとめて、父の亡くなった後、それを出すというようなことで出た、親子二代で作った本なんです。そのなかにどんな絵が描いてあるか、これをご覧下さい。この図を見ますと、タバコだけ抜けて、ほかの四つが出てるわけです（図2）。ヒマワリ、カンナ、マリー・ゴールドとオシロイバナ。元禄時代に出たこの本には四つ揃って出てる。

中国ではどうかというと、これはありません。マリー・ゴールドとヒマワリは出てきますけれど、オシロイバナは出ません。カンナも見られません。上の四つの花はヨーロッパに入って、どの本にも必ず顔を出して、しかもその後普及している。今日調べに行きましても、どこでも栽培してるわけで、その後の普及状態が分かる。日本でもこれらは続けて栽培されてきた。それは欧州の状態が分かってて、人気があるというので栽培したんじゃない。日本人はもとから珍しいものに飛びつくといいますか、尊重する。新しいものを非常に好む、新知識にたいする要求度が高い、といわれておりますけども、その通りです。それでこの四つが後のちまで栽培され、この後に出てくる他の本草書や園芸書にも続けてずっと出てきます（表2）。表2の上二つはオランダの、その次の二つは英国の本でして、十七世紀初めのものです。いま挙げた五つの植物がみんな出てるわけですね。

日本の園芸の本として最初に出た「花壇綱目」（一六八一年）。これにはカンナとヒマワリとが出てる。あとはありません。伊藤伊兵衛のほうは一つタバコが欠けましたけど、四つ出てます。こういうふうに共通点があって、日本ではずっと幕末まで続けて栽培していたと思います。その証拠は日本の江戸時代の画家がいろいろ描いているのに出てくるわけです。

それは後述するとして、江戸時代の本草・園芸書の出版分布を時代別に見た表3

をごらん下さい。これの黒丸は園芸書か本草書の有名なものの出版点数ですね。江戸時代に、私が判断して、よく普及してるというものを百点取ったんです。それでどの時代に出たかというのを挙げてあるんですね。まぁ、江戸時代の初めはあんまりありません。非常に早い時代は巻物でツバキの百椿図とか百椿集とかいうのが三部でてるんですけど、そのうちのはっきりしたものは一つ。そういうことで、たとえば延宝年間は「花壇綱目」ですね。元禄時代になりますと、いま述べた伊藤伊兵衛の本をはじめとして、ずらずらっと現われてきます。それから享保も四点出てます。

この折線はなにかといいますと、百姓一揆が起こった件数ですが、それをね、調べて並行して記入してみたんですね。そうすると、だいたい百姓一揆が起こってる頃に園芸書は、たくさん出てるんです。ずい分以前、私は農林省で園芸品種の登録会議に出てまして、そんなことをいいましたら、園芸の実際家で有名なSさんが同席しておられていやな顔をされました。私がロクなことをいわないので（笑い）。

しかし、それはほんとなんです。何故かというと、やはりインフレーションでね、生活が苦しくなるから百姓は絞り上げられるわけですよ。そして百姓一揆が起こるわけですね。インフレーションの時は景気がいいものですから、江戸をはじめ浪速・京都などの都会の商人たちの懐具合がよくて、園芸が流行してるんです。その証拠は天保元年に出た、「金生樹譜」という本の序のところに珍しい植物を作ると、お金がたまるんだということが書いてあります。天保年間にはオモトなんかも大流行したんです。幕府のほうは取締りをやりまして、そういう珍しいものを集めるのを弾圧したんですね。後からご説明する「草木錦葉集」も完全には出ていないんです。その弾圧に引っ掛かって、後を出せなかったんじゃないかという推定もされています。江戸時代の園芸書はしかしだんだん、増えてきておりますね。ところが、慶応のころになりますと世の中騒然としてきたせいか、ずっと減っておりまして、明治以後、これはむしろ潰されてしまった。

ということで本草・園芸書も、時期によって出方が違う。いま申してきましたことは、西欧で尊重しておった植物を日本でも尊重したという話です。おそらくオランダ人が持って来たんでしょう。中国ではそういうふうに行かなかった。中国のは、有名な李時珍の「本草綱目」が出て、江戸時代には輸入もたくさんされたと思います。そういうことで日本の園芸書は江戸時代に始まってきておる。それをはっきりさせるため、少し画家が描いたものをスライドで見ていただこうと思います。

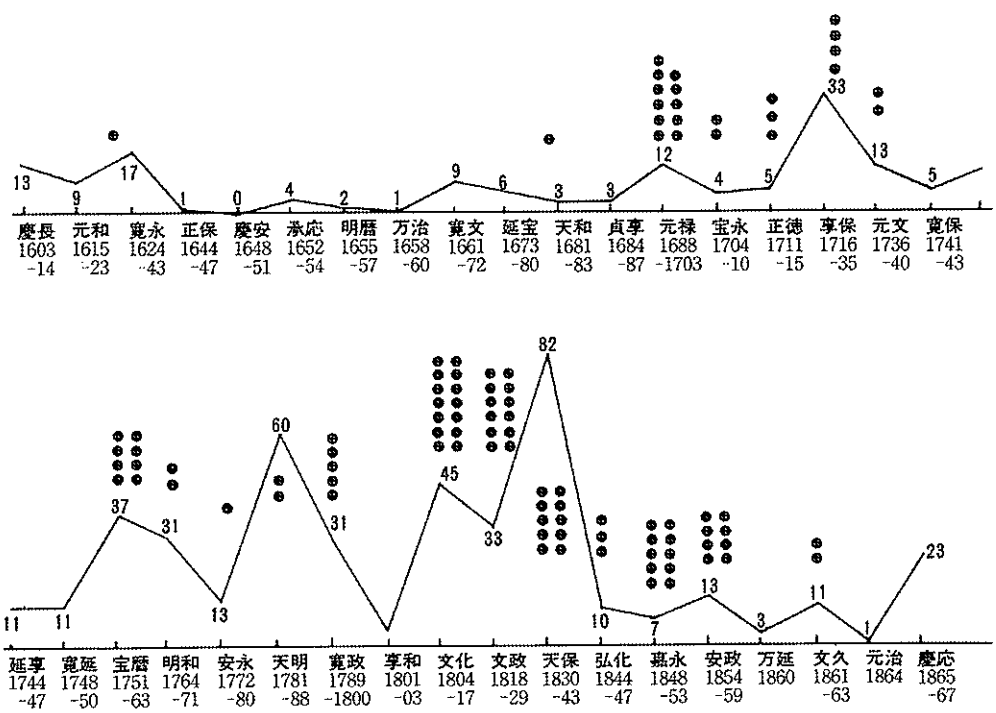
「ホルトス・フロリドス」の、先程カンナの図がありましたけど、それの続きにヒマワリが出てるわけですね。原本は白黒なんですけど、それに色を着けたものが出てまして、これは「ホルトス・フロリドス」のなかのヒマワリの絵①（数字はカラー図版。以下同じ）です。

それからカンナです。カンナの原種はダ

表2　主要園芸書にあらわれた園芸植物(○印は出現するもの)

| | Canna (カンナ) | Helianthus (ヒマワリ) | Mirabilis (オシロイバナ) | Nicotiana (タバコ) | Tagetes (マリーゴールド) |
|---|---|---|---|---|---|
| Emanuel Sweets Florilogium (1612) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| Crispin van de Pass Hortus Floridus (1615) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| John Gerard The Herbal (1597, 1633) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| John Parkinson Paradisi in Sole (1629) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 水野元勝　花壇綱目 (1681) | ○ | ○ | × | × | × |
| 伊藤伊兵衛　草花絵前集 (1699) | ○ | ○ | ○ | × | ○ |

表3　江戸時代の百姓一揆の発生数(折線と数字で示す)とおもな園芸本草書の発行分布(黒丸は種類，全体で100)



ンドク。日本の画家の、江戸時代のものをいろいろ見ましてもあまり出てきませんが、江戸中期の渡辺始興の描いた屏風の中には出てきます。

これは明治時代になりますけれども、村山槐多[2]。この頃のカンナは、これはもう、原種でなしに雑種になったものを描いてますね。

ヒマワリのほうはどうか、これは伊藤若冲の描いた天井絵のひとつです[3]。

それから酒井抱一。これは何枚もヒマワリを描いてます。ここへ出てくるのは、そのうちの二枚です[4][5]。正確に描いてあると思います。抱一はご承知のように琳派のいちばん最後の巨頭です。

これはオシロイバナですね。やはり中期の京都の画家の原在中、この人の描いたオシロイバナの絵です[6]。

抱一の弟子に鈴木其一という画家がおります。彼の絵はボストン美術館にもありますし、ハワイの美術館にもあります。この人のオシロイバナの絵の一部分です[7]。大きいもので、東京の国立博物館にあります。こういうものをね、画家が続けて描いておるということで、普及しておったと、こう私は判断するんです。そうでないかも知れませんけども、少なくともちゃんと注目されて栽培されていたということは分かるわけですね。

これはオランダにいる頃に描かれたゴッホのヒマワリの絵ですね[8]。花よりもむしろもう砕けて種子になっているものを描いていますが。

これが南フランスに行って、ゴーガンがやって来て、耳を切った時の、あの年に描いた五枚か六枚かのうちの一つですね[9]。このシリーズの一枚が今度日本に改めて入ってきました。

これはゴーガンです。ゴーガンもやっぱり描いてる[10]。

それからモネですね[11]。

これはノルデ。これはもう二十世紀に入ってからの絵です[12]。

これはブラックの絵です[13]。ブラックはやっぱりゴッホと同じようにヒマワリ好きだったのか、何枚も描いてるんですが、これは初期の頃の絵ですね。あとはもう立体派の絵になってしまいますけども。こんなふうにいろんな人に描かれている。

これは中村彝ですか、難しい字を書く……。あの人の絵ですね[14]。

オランダのアムステルダムの南のほうに有名なアルスメールという大きな市場がありますけども、その近くには園芸を扱っている人たちの家がずっと続いています。それからライデンの近くにボスコープというところがあって、ここは花木、植木類をたくさん扱ってる集団地があります。その辺りの民家はどこでも花壇を持ってて競争で作ってますが、夏歩きますと、入口にこうしてヒマワリを植えるのを、いまもって習慣みたいに続けてるわけですね[15]。こういうふうにヨーロッパのヒマワリは普及していると思います。

それから、これは一枚しかありませんでしたが、マリー・ゴールド。マリー・ゴー

ルドの絵もたくさんあるんですけど、ヒマワリなんかのように独立して、それだけでなしに、必ず他のものと一緒に加えて描いてあります。[16]

スライドはひとまずこれぐらいにして、話を続けたいと思います。

そういうことで、日本の植物栽培は、また後で申し上げますけれども、幕末になって、有名なプラント・ハンターのロバート・フォーチュンという人が英国から植物集めにやってきて、日本へ来てびっくりしてですね、園芸植物の改良が進んでいて、たくさんのもの、立派なものを植えてると、彼の報告書のなかに書いている。中国ではたくさんの本草書と並行して、こういう園芸植物の扱い方、ウメであるとか、キクであるとか、ボタンであるとか、そういうものの扱い方について、モノグラフが宋の時代以後いろいろ出てるわけです。中国人でアメリカに帰化した人の書いた中国の園芸植物の本 *Li: The garden flowers of China* (1959)、戦争後間もないころに出たんですけども、私が京大に帰ってきた丁度その頃に出たんで、それで買って、いまもってこれをしょっちゅう睨んで、「じつになってない」といって、いつも怒ってるんです。なにがなってないかというと、なんでもかんでも、ツバキもハイドランジェアもみんな中国産であるというふうに書いとるんですね、いい加減なことを。ところが、園芸植物を、横文字で書いてあるのはこれ一冊しかないんです。それで残念ながら参考にせざるをえないのですが、日本のことはほとんど知られてない。

アメリカの国立樹木園というのが、ワシントンD・Cにありまして、私が三十何年前から知り合いになりましたそこの所長をしてたクリーチ氏 Dr. J. Creech、この人は私がヨーロッパに行くよりひんぱんに日本へ来ている、二十五、六回来ている。五島列島から礼文島まで歩き倒してますね。最初に来た時は日本は危ないといってね、軍隊の固形食料をもって来てました。日本の食事食べなかったですね。だんだん慣れて来て、このごろはなんでも食べるけど、それでもね、それだけ来てて見て歩いていてもね、やっぱりどこか落ちるんですね。知らないとこがある。ゴボウなんてのがよく分からないんですね。実際にゴボウに当たってみないと。

「そんなもん食べたことない」「よしそれじゃ食べさせてやる」ってんでね、家に来た時に、ゴボウのてんぷらとかね、煮たものやら出してやったら、珍しそうに食べましたがね。日本へ来て、二か月おったり三か月おったりして、徹底的に植物を調べて、それでそれをみんなアメリカへ送るんです。私は九年前にワシントンD・Cの国立樹木園を訪ねてみましたら、なるほどまぁ、温室から外から、日本の植物をどっさり植えてます。「なぜこんなに日本の植物やってるんだ」と聞きましたら、アメリカはご承知のとおりヨーロッパの出店ですから、ヨーロッパの植物をみんな入れておったわけですね。ところがアメリカの東部ではうまく育たないんですよ。花壇を作っても英国

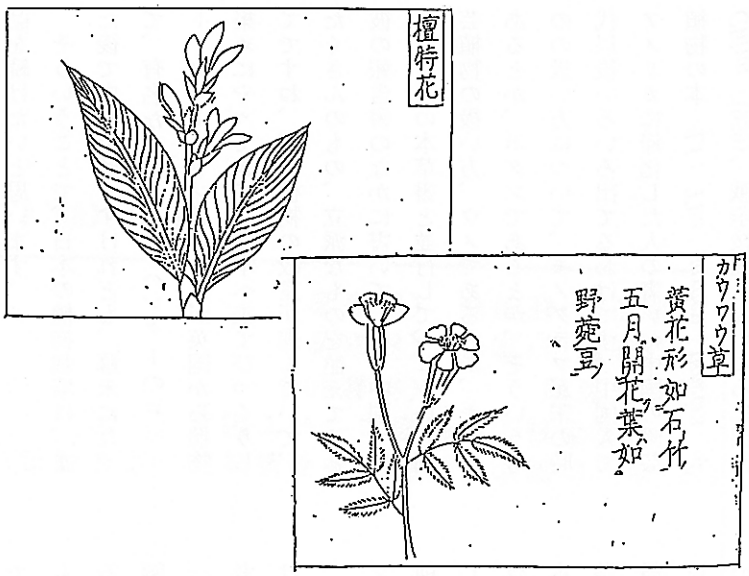


図3 「大和本草」の中の図

ーロッパはその代表なんです。

日本と地中海とは全然違う。地中海と同じ気候を持ってるのは南アフリカ、オーストラリア、カリフォルニア、ですね。西洋と同じ気候を持ってるのは北アメリカの西北であるオレゴン、ワシントン、カナダのブリティッシュ・コロンビア。ここがヨーロッパと同じ気候です。それからニュージーランドもそうなんですけども。そういうことでね、ヨーロッパの植物は、東アメリカではうまくゆかない。第二次世界大戦になってやっと彼らはそれが分かって、日本の植物に注目するようになったんです。それでもう南から北まで歩き倒して、いろんなものを持って帰って、それをいま、せっせ、せっせと交配してね、新しい雑種を作ってる。この点日本ではそれが非常に遅れてます。

そういうことで彼も、この本を見てね、「なってない」と。「自分が三十年かけて調べたのを、今度本を書くから君は手伝ってくれ」ということになりました。彼はいま、下書きをうんと書いてる。今年やって来たんですが、その原稿を読むたびに、私らが横文字でいろいろ出してなかったことは非常に具合が悪いなと思います。日本はいろんなことが非常に進んでるんですけど、西欧の人にはそれが分かってない。クリーチは表1のリストのなかの伊藤伊兵衛の「錦繡枕」。これはツツジ類だけを集めたものでね、元禄五年に出たんですよ、大きさは小さいもんです、これを五冊、それにツツジの花がずっと描いてありまして、それの説明がずっと出てるんですね、そのやり方が非常に独特で、クリーチは非常に感心してですね、日本の農水省にいたかたに手伝ってもらって、英訳を出しました。ですけれども、それは元禄時代のごく一部分を紹介したにすぎません。

日本の園芸書というものが、どういうふうに本草書から分かれていったかをここで話したいと思います。日本の本草書は、ごやスイスみたいに綺麗にいかないんですよ、伸びすぎてね。大陸の東側っていうのは高温多湿ですね。それから冬の最低温度との格差が大きいんです。大陸の西側は格差が少ない。そして夏は乾燥、冷涼ですね。ヨ

承知のように貝原益軒の「大和本草」がいちばんしっかりした本ですが、「大和本草」を見ますと、一応やはり中国の本草書に従ってますね、植物があり、動物があって、鉱物があるというふうに、いろんなものが入ってます。李時珍の「本草綱目」にしても他の本草書を見ましてもみなそうですが、図（図3）の描き方、それが独特ですね。簡略に、しかもなにか曲がったように描いてありますね。「秘伝花鏡」もその影響を受けて、図は正確な写実ではありません。

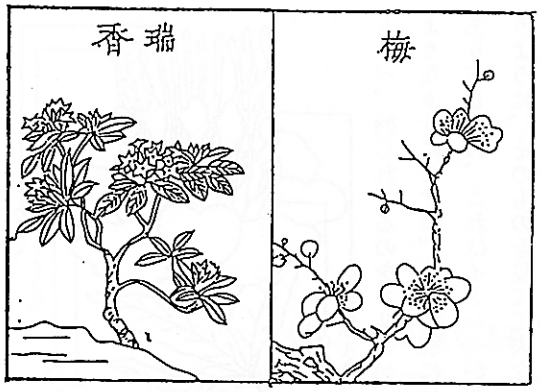


図4 「草花絵前集」の中の図

次に元禄十二年に出た伊藤伊兵衛の「草花絵前集」、このオシロイバナの描き方、彼は植木屋ですから本草の本を読んでるわけでもなんでもないんですけど、割合に写実的に描いてある（図4）。

「秘伝花鏡」のほうはですね、中国の本草の伝統を受けてますから、図がこういうふうな特殊な描き方をしてる（図5）。本草のものはみなこういうふうな伝統を持ってます。後のほうにはツルからコオロギまで出ている。なるほど中国の人たちは、コオロギをしきりに飼育して、楽しんでいる。だからそういうものを入れるのかも知れませんが、ツルからオウム、それからタカからモズからウズラから、ウサギ、サル、みんなこの中に入ってるわけですね。これが中国の園芸の特色であり、スタンダードです。清朝初期に出たんですが、日本の本草の研究家たちはみなこれを勉強しました。だけど植木屋の伊藤伊兵衛はそんなことしてない。見たものをきちっと写実してやりました。さらに写実のうえに工夫を重ねて、いろいろ取り扱いを考えました。

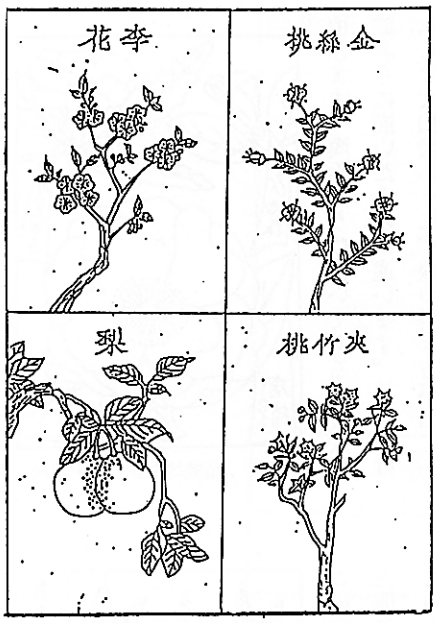


図5 「秘伝花鏡」の中の図

次の例がそれです（図6）。シャクヤクの花です。この「花壇地錦抄」のシャクヤクの図を見ますと、外回りの花弁、これは皿と書いてます。そして雄ずいがいろいろ変化してですね、細いものや、やや平べったい太いもの、こういう変わったものに、花弁の名前をつけてるわけですね。いちばん細いものはイ

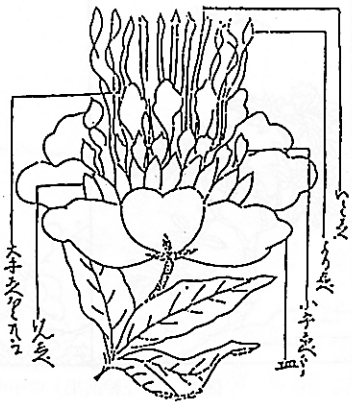


図6 「花壇地錦抄」の中のシャクヤクの図

トシベ、捩じれてるのをヨリシベ、というようなふうにですね。そして別に品種名がありましてね、これはイトシベが多いというように、そのものを見て工夫をしておるということがいえる。いま申しましたように、日本の園芸の本に動物入ってるのはありません。全部落としています。そして植物そのものをよく見てます。

それから続いて「増補地錦抄」、「広益地錦抄」、これは四代目の伊藤伊兵衛政武が書いた本です。この図（図7）を見ますと、中国の本草書や園芸書に出てくるのとどこか違います。やっぱり絵の世界で、漢画と大和絵というのは違いますね。後でも見て頂きます。漢画ふうに書いてあるのと大和絵ふうに描いたものは違います。日本のはみんな大和絵ふうに、線の引き方が出ているわけですね。

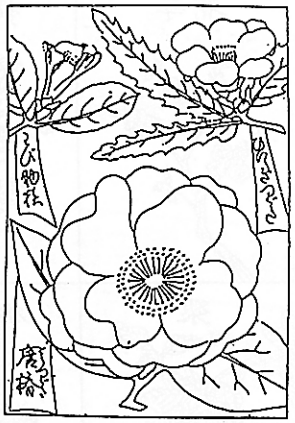


図7 「増補地錦抄」の中の図

このツバキ、たとえばヒイラギツバキ、トウツバキ、これは中国の雲南のほうにあったのが日本へ江戸時代に入ってきたわけです。それからワビスケツバキ。これも中国から入ってきただろうと、ツバキの研究家たちはいまそういう説に落ち着いておるんですけども、中国のどこから来たかはよく分からない。またなにかの雑種であるかも知れないわけです。

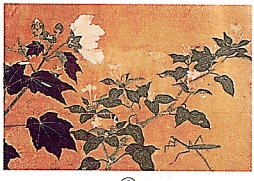
つぎにモミジです。このモミジ（図8）は「広益地錦抄」に描かれているものです。この本と「増補地錦抄」、「地錦抄附録」、三冊の本のなかには、合計百種類の品種をこうして葉を描いてですね、その後に説明がある。葉の形で区別してます。こういうのが日本の園芸の特徴であります。これがだんだん昂じてきて、日本の園芸では花でも葉でも形が変わるということに非常に価値を認めておったわけですね。花弁が曲がったり、形をひねったりして。ところが西洋ではそうはいきません。西洋は花壇を中心にした園芸から発達しましたから、全部の、ひとかたまりのマス。マスを変えようと思うと花色ですね。だから西洋の園芸では花色の進化というのを昔から大事にしてきました。日本の江戸時代の園芸というの

図8 「広益地錦抄」の中のモミジの図

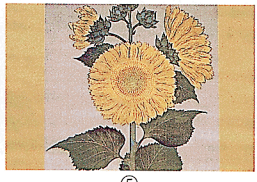
③

②

①



⑥



⑤

④

⑨

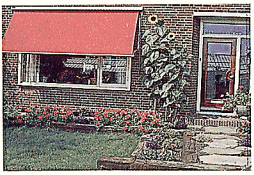
⑧

⑦

⑫

⑪

⑩

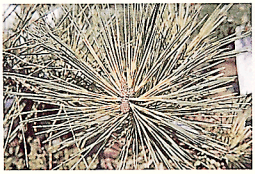


⑮

⑭

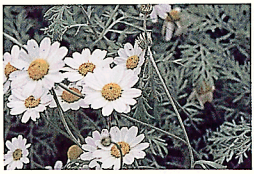
⑬

⑱



⑰

⑯



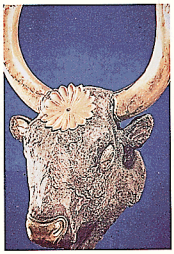
㉑

⑳

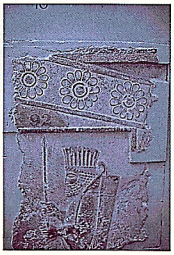
⑲

㉔

㉓



㉒

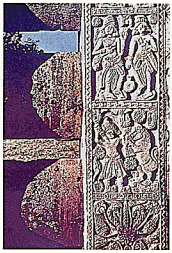


㉗

㉖

㉕

㉚



㉙

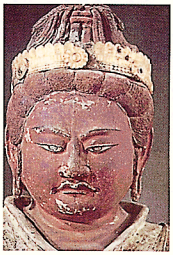
㉘

㉝

㉜

㉛

㊱



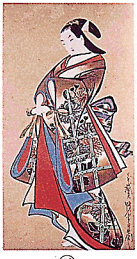
㉟

㉞

㊴

㊳

㊲



㊷

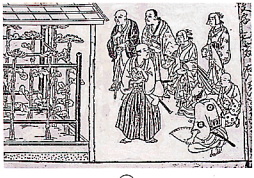
㊶

㊵

㊺

㊹

㊸



㊽

㊼

㊻

51

50

49

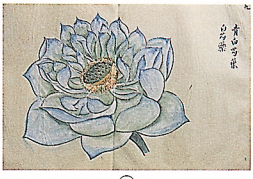
54

53

52

57

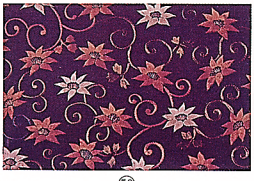
56



55

60

59

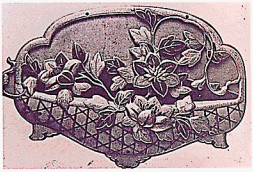


58

⑥③

⑥②

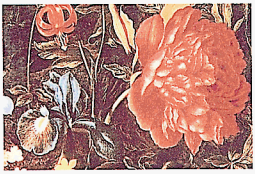
⑥①



⑥⑥

⑥⑤

⑥④

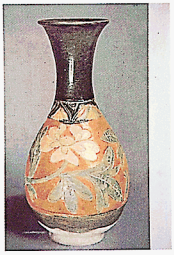


⑥⑨

⑥⑧

⑥⑦

⑦②



⑦①

⑦⓪

⑮

⑭

⑬

⑱

⑰

⑯

⑪

⑩

⑨

⑭

⑬

⑫

⑧⑦

⑧⑥

⑧⑤

⑨⓪

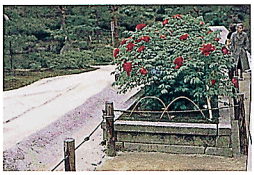
⑧⑨

⑧⑧

⑨③

⑨②

⑨①



⑨⑥

⑨⑤

⑨④

は、非常に小さなマツでいいますと、クロマツにジャノメという白・黒の混ざりがありますけど、段々になってる。[17] これは普通の品種ですけど、葉のいちばん先端が曲がったのを折り鶴といいましてね、こんなもの近くへ行って見ないと分からんでね、なにが折り鶴やら分からん。ちょっとこう曲がってるわけですね、それを尊重します。それから葉が捩じれたやつがありましてね、これスイケンショウという品種名。[18] 水犬松というのは水に溺れた犬の毛だと。なるほどこう……（笑い）。そういう形にたいする尊重。それは後で江戸の終り頃に出てくるイワヒバ、マツバランなどでも非常にはっきり現れてきます。キクでもそうです。江戸時代の終りにいろんな花形のキクが出てきました。そういう特徴のあるものを作っていきます。現在では我々自身が西欧化された生活をしていますから、以前と同じではありませんけれども、やはり日本にはそういうものが強いということを、ご承知下さい。

それで、いま申してきましたように、本草から出たんですけれども、中国の本草が持っておった動物のようなものをみんな落としてしまいまして、江戸時代の終りごろになってきますとね、園芸植物がいっぱい入って来ます。そのいちばん極端な例が、昨日も北村先生が話しておられた岩崎灌園の「本草図譜」です。天保元年から十五年かかって完結します。私も翻刻のお手伝いをして、その解説をこの何年かやりましたんです。で、よく分かりました。「本草図譜」の中には九十二冊のうちに、たとえばハスの花、これだけで三冊とっておるんですよ。幕末に、松平定信が老中を辞めましてから自分の邸宅にハスをたくさん集めまして、その時に百蓮図というものを描いて出しておったんですけど、その現物はいまはありません。しかしそれを模写した、現物に近いものが残ってましてね、京都植物園も一冊持ってます。それと、この「本草図譜」の三冊のなかのハスはどう違うかというのを、あとで比較して説明を致しますから、どんな絵を描いておったかスライドでご覧下さい。それから灌園のツバキは一冊出てます。

灌園は本草の線に沿ってずっと説明をしてきてるんですけども、脱線して園芸のものがいっぱい入ってきています。こういう見方、それから先ほど申し上げました図のネジレ方。中国の本草にはそれがつきまとってきます。なぜそういうものを持ってきたか、私もよく分かりませんでした。みなさんはどうお考えなのか、昨日もちょっとお尋ねになっておられましたが、本草につきまとっている。私は本をいろいろ乱読するんですけども、三年ほどまえに「地価革命」という、堺屋太一さんの本を読んでましたら、ヨーロッパでも中世時代の植物やいろんなものを変形して、ネジレて描いてある。自然でない価値を持たせて、わざわざ自然から離れたように描いてあります。ルネッサンスになってそういうもの、中世の価値というものが壊れた時に、自然が復興してくるという見方をしておられた。そ

れはそうだ、どうも中国の本草にはそれがつきまとってるんやないかな、ということがひとつ気になりました。

それから動物を落として園芸的に変わってきた、これは日本の本草の特徴であるというのは、上野益三先生の本に書いてあります。それを読んでから上野先生の本は全部買い揃えて読んだんです。それはその通りだと思います。そういう意味で、日本の本草というのは江戸時代の末期に園芸的になってきました。じゃあ日本の園芸自身はどういうふうになったかと申しますと、はじめはやはり中国の模倣から始まったと思います。中国はだいたい本草を非常に尊重してきました。園芸植物を見ましてもウメ、ボタン、モクレン、カイドウとか、そういう木本植物が多く出てきます。中国庭園に使う植物はそういうものが多いわけですね。日本もその例に習ってですね、ツバキ、サクラ、モミジ、そしてツツジと、こういう日本独特の木本植物を加えていきました。それから中国から入ってきたウメ、ボタン、これも独特な育種を行い、品種を作っていきました。それで日本の本草家の松岡恕庵(恰顔斎)、この人は京都の本草家で、京都には本草学者が江戸時代、代々いて、全国の本草を勉強する人は京都へ集まってきておったんです。その恰顔斎の書いた「桜品」、「梅品」、小さい本ですけど、これらは見ていましても非常に楽しいです。図が正確に描いてある。それからですね、これは何処にある、何処のお寺の庭にあると書いてあって、それを見ますと、暇があったらそこを訪ねて行って梅を探してみたいなぁという気になります。非常に写実的に描いてあります。それからディスクリプションを正確に書いてあります。ところが中国のものは、訓詁的に書いてありますから、ウメでもキクでもみな過去の〝杜甫の詩にどうある〟とか〝李白がどういった〟だとかいうのが必ず出てきますね。

日本のほうはそうでない、非常に写実的で、そのものずばりに当たっていく。そういう違いが出てまいります。そうして最後には木本を離れて日本の自然にある野草、それはなにかというと、サクラソウであり、カキツバタであり、ハナショウブであり、オモトであるとかイワヒバ、そういう独特のものを改良してきました。それは江戸時代の後半、だんだん後になるほど盛んになってくるだけです。今日に到っても、やっぱりオモトの会、カンノンチクの会というのが依然として盛んです。これは非常な細かいところの違いをやかましくいっている。私もオモトの会のかたが何回もやって来られて、とうとうオモトの会の顧問になっとるんですけどね、はじめはあのオモトが嫌いでね(笑い)。ああいうものは園芸植物から追放せよなどと思って(笑い)、ところがオモトの世界の人々にいろいろ聞いて見ていると、「エライモンダナァー」と、とうとう感心して見るようになりました。あの変化というのはほんとに微妙なもんでね、「ようこれだけ変わったものつくり出しよった」と思って感心しておるんです。江戸の終わりごろから明治にかけてたくさ

んオモトの本が出てるわけです。そういうのを見てあげなくちゃいかんと思いまして……。そういうふうにひとつひとつ種類ごとに独特の歴史を持って、日本では発達していった。そういう点で中国は、「秘伝花鏡」のところでほとんどストップで、ずっと後の本を調べてみますと、このリストの最後にあります「植物名実図考」、これは清朝の道光二十八年、一八四八年に出たもので、「花鏡」よりも多くの植物が入ってます。それから図は「花鏡」より一歩写実の方に近づいております。しかし、完全にそうではありません。一八〇〇年代のこの時代だと、日本のほうはやがて飯沼慾斎「本草図説」が最後にリンネ式の配列で植物を扱うところへきています。この間に、さきほど申しました、金太「草木寄品家雅見」、水野忠暁の「草本錦葉集」この二つの名著が出ています。両方とも立派なもんです。いまからもうかれこれ十年近く前になりますけれど、東京の美術書を出しておられる有名な本屋の社長がすっかり惚れ込んで、出版したいといわれましてね、和紙は北陸へ行って、江戸時代のとほとんど変わりのない紙を作らせて、翻刻を出したんですよ。大きなものですからひとつ四万円か、五万円しまして、売れなかったんです。お気の毒で申し訳ない。それから先ほどの「錦繡枕」も翻刻を出しました。これもあんまり売れなかったんですね。そういうところを見ると、まだ日本ではそこまで一般のかたがね、知的に高いレベルを求めていません。岩崎灌園の「本草図譜」は九十二冊ですから、ずーっと積み上げるとこんな高さになります。これは同朋社が五十四万円で出したんです。七百部出して大体売り切ったようです。なかにはなにも知らないで買ってる人も少しはある。私の本籍の九州の福岡で医者をやってる親戚の者が、私の名前が出てるというて、なかがなにか分からんで、買いました（笑い）、あんなもの買って放っておってもなんもならんのですけど（笑い）。

それで先ほど申しましたように最も特殊な発達をしたのが、変化アサガオです。この変化アサガオというのはね、このままでは種子が採れない。みな花が変わってしまって、雄ずいが糸みたいな花になってるから、種子は採れません。だからこれが出た兄弟の種子を採って蒔いて、来年その苗を見て「これが変わりそうだ」というのだけ残して育てるんですけど、これが出るとはかぎらないわけですね。江戸・京都・浪速の三都を題とした「三都一朝」という変化アサガオの本も出ていますけども、みな競争でこの変わりものを求めた。咲いたら一日で終いです。だから絵かきをすぐ呼んでですね、描かせたものなんです。変化アサガオのこのような本は十五、六種類は出ております。いまから花の発達に関連のあるスライドを見ていただいて、お話ししましたことを目で見ていただきます。

まずキクの世界。これはアッシリアの地域の紀元前十三、四世紀の古いもんです。そのころの金属板の彫刻ですね。[19] この真ん中に現れているのが、菊の紋に近い模様で

す。これがどんどん出てくるわけです。これはアッシリアの石のレリーフです。[21] これをたくさん集めてあるのは大英博物館で、一部屋ずっと並んでいます。何回もこれを見に行ったんですが、アッシリアではこの菊模様がいわば国旗みたいなもんで、旗はありませんでしたが、必ずこれをつけています。

これは中心が黄色で白の花弁のキク。この地帯にあるキク科にはアンセミスであるとかマトリカリアとかの属が分布していますが、これはアンセミスという種類です。[21] 日本の菊とはどこか違います。こういうものを土台にして、デイジー模様を作ったに違いない。

これは紀元前一五〇〇年に作られたクレタ島のものですね。[22] クレタ島の博物館に置いてあります。この菊の文様はアッシリアのサインです。これがエジプトの方に伝わって行って、エジプトのレリーフにも出ます。これはエジプトの紀元前一八〇〇年ぐらいのものですけども。デイジー文様をご覧のように耳の飾りにつけてますね。[23]

これもエジプトでできたもの。石版の模様ですが、ルーブルにあるのをガラス越しに写したものです。[24] 中心にデイジー文様があって、回りに睡蓮の文様が取り囲んでいます。睡蓮の文様はエジプトのサインです。

東に移りまして、古代イランですね。金のカップです。[25] そこへついてるデイジー文様は日本の皇室の菊の紋に非常に似ています。

デイジーはイランあたりではヨーロッパと違う属のものがありますけれども、地中海東部に多く似たものが分布します。花弁数が非常に多くて、あちらで春栽培してるデイジー、ベリスという属です。真ん中が黄色で花弁が白というのを元にしたんだと思います。花弁が黄色のものもあるんですね。春菊なんかはそれに当たります。

これはやっぱりイランのものです。[26] 先ほどのものがこの後にペルセポリスの残骸のとこにも出てきますよ。このデイジーの花形ですね。[27] この形が日本へ入ってきます。

これはペルセポリスの遺跡の残骸についてるイランのデイジー文様ですね。[28] それがインドへ移りました。

これはインドです。紀元前二世紀ごろの仏教の、仏陀の生涯を示したものと同じところに出てくるんですけど、この真ん中のあたりに出るデイジー文様、これは西から来たんだと私は思います。[29] というのは、このライオンを殺す兵士の図はイランの西、アッシリアやスキタイのあたりの昔からの代表的な絵のテーマですね。正倉院の織物のなかにも、この文様がでてきます。それがインドへ入ってきてる。ですからデイジー文様もインドで考えたことではない、西から入ってきたんです。

これはかなり後で、仏像ができた後の頃、紀元後三、四世紀ごろのインドの彫刻なんですけど、仏様の下にもデイジーを敷いている。[30] それはさらに、中国を通って、日本へ到達するわけですけど、中国のものが思うようないいものが無くて、スライドは抜けてますけど、あるにはあるんです。倉敷

の美術館の後ろのほうに中国のものがあり、紀元後三、四世紀ごろのがあります。

これは薬師寺です。朝鮮半島を経て日本へ入って来たのか、どこで作られたのかは知りませんが、この薬師観音はいま、ボストン美術館所蔵のもので、ボストン美術館展のときに出てたものです。[31]下の蓮の花弁のひとつひとつにデイジーをつけてるわけですね。

で、とうとう日本へ入ってきます。これは奈良の、法隆寺の仏像。[32]この胸やなんかに出てるデイジー文様にさっきのペルセポリスにあった形が出てくるんですね。

これは薬師寺の日光菩薩です。[33]この胸飾りのところへ出てきます。

これは新薬師寺の仏像です。[34]ある出版社の奈良の仏像の写真では迷企羅大将となっておったんです。で、私は新薬師寺に行ったんですが、これは迷企羅大将ではないんですよ。違う名前なんでね。十二神将の一つですが、腰にバンドをしてましてね。あとの十一人はしてないんです。この人だけベルトをしてまして、それに菊文様がついてる。その胸当てにもついてる菊文様は、ペルセポリスと同じ形なんですね。こういうものをずっと見てますとね、日本にはペルシャの文化が入ってきたんだなと思います。松本清張もそんなこというてるようです。

つぎは秋篠寺にある仏像です。[35]

ところが時代がずっと下ってきますとね、これは京都の広隆寺の神将[36]ですけども、この胸の飾りのところは違ってきてます。ペルセポリスにあったままの同じ形でなしに、これは真ん中がヒマワリの芯みたいになってね、専門語では管状花ですね。それは平安時代ですね、こういうふうに変わってしまいます。

これは大津のお寺にある仏像。[37]この光背にある菊文様だってもう非常に芯が小さくなって、まえのとは変わってきましたね。平安時代のものです。じつは菊の花は奈良時代に日本に到達したといわれていますから、平安時代に広がってるわけです。鎌倉時代は当然のことなんですね。

これは北野天神縁起の絵巻物のなかに出てくる、菅原道真が恩賜の御衣を出して涙にくれている、その御衣を入れている行李に、菊の紋がついてます。[38]この絵そのものは一二二〇年頃のもので、後鳥羽上皇が菊の紋を制定されたというわけで、鎌倉時代の絵なんですけど、昔に遡って、あの菊の紋の行李と、それから庭に白いこの花を植えてるのが見どころです。鎌倉時代をだんだん下ってきますとね、もう庭に菊が植えられていますから、それを模様化したらこうなるということになりますが、鎌倉時代につくられた西大寺のすかし彫です。[39]葉も花も菊の花を表していますけども、菊が広まったからです。

室町時代を飛ばして、桃山時代に入りますけど、これは長谷川等伯の襖絵です。[40]花は小型ですね。同じ頃に、このほうは西本願寺のやはり襖絵[41]ですけど、花色がいろいろできてます。それでも花形は同じです。

江戸時代に入ります。懐月堂安度の立ち

美人[42]、かなり大きな菊の花絵がありまして、これは京都の若冲の絵ですね[43]。これはもうずっと後になりまして、抱一の弟子、先ほど申しました鈴木其一が描いたものです[44]。ですからもう幕末なんですね。ところがこれらを見たかぎりでは花は大きくなってませんね。この絵そのものはボストン美術館、屏風絵展がいまから五、六年前ですかね、ありまして、その時持って来られたもので、非常に綺麗な絵です。

中国では古い菊の絵がなかなかないんです。これは明の時代の絵です[45]。これを見ると花はかなり大きい。これは清朝の有名な花鳥画を描く人の絵です[46]。画家が描いた絵そのものは、非常に写実的でね、西洋の絵と少しも変わりがない。こういうものを描いておったんですね。ところが本草の絵は違う。そういう、違いがあるわけですね。

日本の菊の園芸書からいくつか拾ってみますと、これは元禄時代に出た、日本の菊の園芸書のなかではいちばん古いもののひとつ[47]。品種名が書いてあってね、説明はみんな漢詩で書いてあるんです。それから元禄を過ぎて享保のころに出た、菊の栽培、これを見ると一本ずつ大きな花を咲かしてる。いま菊栽培の品評会にもってくる菊は、みんな一株に一つでっかいものを咲かしてる[48]。そのやり方を江戸時代からやってる。いまはこういう土に植え込んで伸ばすことはやっていませんけども、江戸時代はこういうことをやっておったんですね。それからさらに、京都から出た本ですが、この時にはじめて花が大輪になってくるわけですね[49]。この品種では七寸八分の大きさっていうから、かなりでかい。今日でいうクダモノのような形をしています。その時代には花を持ってまわるのにこういうふうに大きな箱にひとつひとついれている。品評会に持ってまわる、いまでもみんな非常に気をつけて持ってまわるんです。こういうことをやっておったんですねぇ。一八四八年、もう江戸も最後というころに出た小さい本ですが、これを見ますとね、いろいろな色、形が出てくるわけですね。ひとつひとつ花の形に説明があります。なかにはこういうでっかいものが出ています[50]。

その後、北斎の絵がこれなんです[51]。一八五〇何年か、北斎が八十何歳、もう死ぬ前の年ぐらい、この絵はねロンドンでいまから十数年前に出てね、長野県の北斎美術館がありますね。出たときに芸術新潮に載って、これは贋物だとかいろいろ、問題が出たんですね。私は本ものだと思うのですが、なぜかというと、さっき見ていただいた小さい菊の本を見てますとね、あれに出てくるものはみんなこんな感じで出てくるんですよね。だから知らないで、想像してこれを描けるはずがない。その時代の菊を知っててこれを描いたんで。それから「色がきれいすぎる」と。しかし鉄斎でも八十六ぐらいで、きれいなもんですわ。だからああいう大画家はみんな同じですよ。マチスでも……。そりゃ北斎でなくてもいいんですが、北斎でないと値段が上がりませんから(笑い)。私が北斎美術館へ行った時には見ることができなかったんですが、去年か一

昨年か三越の展覧会にこれが出まして、本物を見て「すばらしいなぁ」と思いました。くり返しますが、この絵は一八五〇何年かに出たんですけどね。この後、一八六〇年、万延元年に先ほどちょっと申しましたロバート・フォーチュンが日本へやって来ました。秋に日本へ来て菊の展示してあるのを見てびっくりしたわけです。こういうものがあればびっくりしますね。彼はその次の年にまたやって来て、挿苗をもらって英国へ送ったんです。それがヨーロッパの菊ブームの元になった。

しきりに交雑して、一八八〇年前後にヨーロッパに出回ったんですね。印象派の連中が、その菊を描いたんです。これはルノアール[52]、これはドガです[53]。こんなふうにヨーロッパの菊ブームが十九世紀の終わりに広がったんですね。それから、幕末に流行りましたマツバランです。マツバランの本は同じ年に三冊ぐらい出ていますが、全部大坂から出たんです。これは江戸から大坂までずっと流行ってたもので、葉っぱを観るんですね[54]。下等植物ですから、牧野植物図鑑をみなさん見られたらいちばん最初にこれが出てきます。シダよりもなお下等なものです。岩の上にひっついている植物で、日本独特のもの。それをいろいろ胞子を蒔いて変りものを作ったんですね。これが江戸時代の終わり頃ですねぇ。これから後はさっき申しました蓮の「百蓮図[55]」。蓮の花のいろんな品種を挙げてます。だれが作ったか分からない。松平定信が最初やったんですね。定信が持っておったものを写したのが最初なんです。たくさんありますのでしばらく見て下さい。実際は白でこんな青い影はないんですけど、陰影をつけるためにこういうふうに色を着けております。

これは朝顔です[56]。これは二段咲きになってね、上のほうが獅子ボタンになります。これも上のほうは葯が花弁化したものです。

このつぎはクレマチスのことを聞いて下さい。

秀吉が使っておった蒔絵類のいくつかは京都に残ってまして、時々京都博物館に陳列されます。そのうちの幾つかは海外に出ておりまして、これはアメリカに出てるものです[57]。有名なもので、美術書を開くとよく出てきます。テッセンですね。ワシントンのフリア美術館にあります。いっぺん行ってみたいなぁと思っておったら、うまく八年ほどまえに訪問できて、入りましたらすぐにこれが置いてあったんです。「これが長く写真ばかりで見ておったものか、案晴らしいなぁ」と思いました。文句があるのは、テッセンは寛文年間に入ってきたといわれていることです。先ほど説明致しました地錦抄シリーズの「地錦抄附録」といういちばん最後に出た本のなかに書いてある。寛文年間に入ってきた植物のなかに、テッセンと書いてある。テッセン・カザグルマ。それで牧野富太郎先生や白井光太郎先生なんかもそれを尊重してね、寛文年間に入ってきたとしてるんです。けれどずっと以前にこういう蒔絵が出ていますし、これも江戸の初期の能衣裳の模様ですが、ガクが八枚ですね。ですからカザグルマです[58]。

六枚だとテッセンです。これはテッセン、狩野探幽のスケッチ・ブックです。[59] これは北村先生の解説でやはり十数年前にでました、そのなかのひとつ。次は妙心寺に天球院というお寺がありますが、そこの襖です。[60] これは江戸時代の初期にできたものです。ときたま秋に開放してくれますので見に行きました。これはテッセンですね。ガクが六枚ですから。べつに八枚のカザグルマも描いてある。これは正確に両方描いてある。こういうものがいくつもあるということは、現物がなかったら描けません。

それから中国の絵を真似したんだろうという意見があったとしても、中国の絵にはありません、ほとんどありません。台北の故宮博物院には、唐以来の絵は全部カードがあるんですよ。それを見れば分かるんです。それからもう一つ、東大の鈴木敬教授の編纂された「中国絵画」、これは中国由来の絵画で自由諸国にあるものを全部集めてあるんです。あれは小さく縮尺した写真ですから見にくいですけどね、有るか無いかは見ることができます。絶対出てきません。ですからクレマチスは日本人が戦国以来楽しんでおった植物だと思います。

「花木真写」という、絵でなしに実物を写したものが、近衛家の出版で出てるんです。やはり北村先生の解説で淡交社から復刻が出ました。このなかに出てくるんです。[61] カザグルマがいかに江戸時代に品種化しておったかが分かるわけです。残念ながら園芸の本を見てもわずかにしか描いてありません。これは懐月堂安度の立ち美人のなかの着物の柄、これはテッセンです。[62] それからこれはやはりボストン美術展の持ってきたもので宮川長春の浮世絵。[63] これもテッセンをきれいに描いてます。これ以外にも江戸時代の衣服の展覧会を見に行きますと、よく出てくるんです。これは抱一のもの。[64] これは若冲のもの。[65] カザグルマですね。次は江戸時代のテッセンの模様の襖の取っ手です。[66]

カザグルマは日本の原産ですが、牧野先生は文献の影響でしょうか「中国から入ってきた」というふうに書いておられたんですが、そうではなく最近カザグルマの専門の若い人たちが自生地を見つけて、いまは天然記念物になってますから、日本のものです。テッセンは明らかに中国から入ってきましたけども、先ほど申しましたように中国ではほとんど絵にはなっていません。日本人が非常に好んで育てたものです。現在日本で作った品種には非常にいいものが出来て、私もオランダに紹介しまして、いまヨーロッパに出廻ってます。

話は変わって、最後にシャクヤク、ボタン、それを見ていただいて終わりにしたいと思います。これは「パラダイス」、フランクフルトの美術館が持っている絵です。これを昔一度見て、十二、三年前にもう一度確かめに見に行ったんですが、小さいものです。この絵を見ると私らはたいへん楽しいんですけれども、まえのほうにスズランとか、ここにスノー・フレーク、それからプリムラ類、みなヨーロッパの野生のものが描いてあるんですね。ここにあるのが

オランダ・シャクヤク。ペオニア・オフィシナリス。大きくして見ていただきますと、こうですね。[67] これを昔から栽培しておったんですね。西洋の自生のイチゴもついてる。これはドイツのデューラーが描き残しております。オランダ・シャクヤクの絵。ヨーロッパに自生しているシャクヤクです。[68] これは一六五〇年頃の絵でルーブルにあるブリューゲル、親父のほうのブリューゲルは有名な絵をたくさん残していますが、子供のブリューゲルは花の絵ばっかり描きました。そのブリューゲル（子）の描いた絵のなかのこれは八重のオランダ・シャクヤクです。[69] 一六〇〇年ぐらいになると、八重のシャクヤクがヨーロッパでは広がったんです。しかし、オランダ・シャクヤクは花の色や形の変化もなかったんです。後に、中国、日本で栽培されたシャクヤクが西洋に入っていって、非常に歓迎され、今日はシャクヤクといえば、中国原産のペオニア・ラクティフローラが中心になってます。その原産地はどこかというと北京の北西のあたり、昔そこには遼という国ができまして、宋を北から圧迫しましたね。金・遼・元と北のほうに大きな、力のある国が現れて宋は政治的に弱い国になってしまいました。ところが文化的には大変なもの、本草や園芸の本をいろいろ残している。この遼という国は遼三彩を生みました。一九二〇年代にごっそりこういうのが出てきたんですね。この遼三彩は芍薬紋となってるんです。[70] これがシャクヤクであるかどうか分かりませんけどね、そのあたりはシャクヤクがいっぱい自生してるわけです。これもそうなんです。遼三彩です。[71] これはパリのギメ美術館にありましてね、何回か通いました。これはものすごくきれいです。「素晴らしいなぁ」と思いまして、私感心しました。これ芍薬紋、シャクヤクが美術に出てくる一番初めなんです。あと中国の絵にはあまり出てきません。これは惲寿平、清朝のはじめに出た花鳥画の大家ですが、この人が描いた八重のシャクヤクですね。[72] 中国にはこの程度の八重のシャクヤクしかない。これも惲寿平の絵ですけども、こういう単純なシャクヤクしか出てない。

ところが日本に入ってきていろいろ変化しました。これは名古屋城の扉の絵です。[73] これのまえにボタンと書いてありますが、これはボタンではありません。見たら分かりますが花が違います。それから立てば芍薬と昔からいうてるように、すーっとこう立つんです。シャクヤクですけど、それが分かってない。これを見て私が嬉しくなるのは、江戸の初期に名古屋城を造った頃に白と赤、これだけ色の違うシャクヤクを日本で作っておったわけですよね。これは秋田の小田野直武のもの。[74] この人の絵はここが重なって見えますとね、花の色と非常にコントラストが美しい。日本人は、先ほど申しましたようにね、形の変化を非常に凝るわけです。その結果いろんな花のタイプを表すわけですね。で、シャクヤクはヨーロッパに伝わりました。これはルノアールの絵です。[75] ルノアールの全集で、美術の人はどうしてあんなに植物に無関心なのかと

（笑い）うんざりするんですけど、これの解説を読みますとね、後ろにあるバラの色がよく出ていて……なんて、もう呆れてね（笑い）。これはパリにあります。この絵は日本にも来て、私は日本で見ました。これはマネですね。[76] マネは何枚も描いてる。印象派美術館のなかにこれは入ってます。さらに二十世紀になってマチスの描いたもの、[77] ここぐらいだとね、我々も「ああ、これは芍薬だなぁ」と見当がつきますけど、これ以上崩れると分からなくなります。

このあとボタンです。ボタンの一番古いのは中国の唐の時代に彫り物[78]に残っているわけですが、これがボタンとされています。その後出てくるのは宋の時代の焼き物ですね。[79] ところが奇妙にこういう握り飯のような、三角の高いボタンの花を描くんですね。この絵なんかは、これ枕ですが、じつにボタンの葉の特徴をよく表しています。[80] 次は宋の時代の織物です。[81] こういうふうに高くなるわけです、八重でね。これは知恩院に入ってる元の時代の絵です。[82] これを見ますとね、桃色・赤・黒っぽい牡丹、いろんな花の色の変化ができておったことが分かるんです。あの赤い花は芯が飛び出してますが、この下のほうのこれですね、これはさっきあったように盛り上がってますね。日本のボタンでこんなものは全然出てこないですね。これを非常に疑問に思っておりまして、二度ばかり中国のボタンを観にいきまして、一度は洛陽に参りました。ところがそのまえに大庭先生の本を拝見してましたら、江戸時代に長崎から日本のボタンをだいぶ中国に輸出したという。それがもう混ざってしまってて、この日本のタイプのやつがかなり栽培されてるんです。あっちの人と座談会をしましたらね、やっぱり中国ではこの盛り上がりは最高のボタンで、これを研究したのが現代になって出て、北京の林学大学のかたがプリントを下さったんですよ。これは花のなかに花がある二重花、植物の世界にはよく出てくるんです。そういうふうになったものを拾い上げたんですね。だからよっぽど丁寧に見なければ出てこない。日本では出てもこんなもの捨てたと思います。日本のものは徹底的に芯が出てます。これは明時代の焼き物。[83] 東京の出光美術館にこの皿はいまでもいつも置いてある。これはやっぱりね盛り上がりの花ですね。これは清朝の壺の焼き物です。[84] こうしてやっぱり盛り上がるんですね。これは現代の斉白石の残した絵です。[85] 典型的な中国のボタンといえばね、やっぱりこういうものを好む。これは日本の鎌倉時代の織物でボタンです。[86] 芯がはっきり出て、ああいう盛り上がりはありません。これは大覚寺の狩野山楽の、日本のボタンの絵といえばこの狩野山楽が代表的なんです。これも真ん中に芯が出ますね。[87] それからこれは妙心寺にある海北友松の絵[88]ですが、先ほど申しましたように大和絵のほうはこういう描き方しますが、漢画の絵はこういうふうにちょっと違いますね。だけど描いてるのは芯の飛び出した日本のボタンです。これは若冲のものです。[89]

ボタンの本を読みますと、牡丹の道しる

べというのが元禄時代にでてるんです。ボタンは白と赤、と元禄時代にもう書いてるんです。それにしたがってね、ボタンの絵というと必ず白と赤。これは応挙の描いたボタン[90]ですが、珍しく桃色があります。またこれは抱一の描いたボタン[91]なんですが、赤・白の他に桃色がついています。北斎[92]。これは広重[93]のもの……。

最後に実物、これは洛陽に行った時に見たものですが、これでなるほどここは乾くということ分かりました[94]。これね土を掘り下げてある。いっぺん下を掘り下げてね、低くなったところに植える。スペインなんかに行くとみなそうやってますけどね。乾いたところではみなそうやるんです。日本でこれやったら、百株植えて百株とも駄目になります。死んでしまいます。日本では後でご覧に入れますけど、銀閣寺なんかは高くした花壇に植えたんです。これは北京の市内。中山公園にボタンが集めてありまして、ここも中へ入れて貰いました[95]。

これは最後に銀閣寺のボタン[96]。こういうふうに日本では昔から壇を作ってね、花壇、それに植えたんです。そうしないとボタンは育たなかったんですね。そして日本ではいま申しましたように、平たい、芯の出るボタン。そして中国では盛り上がりの花、あれはね、雨の少ないところではああいうふうにきれいにいくんだと思います。それで気候の影響が分かります。